

エゴグラムからみた看護学生の 自我状態と実習評価との関連

豊田 久美子, 任 和子, 中井 義勝

The Relationship between Ego States Assessed by
the Egogram and Evaluation of Nursing Practice in Nursing Students

Kumiko TOYODA, Kazuko NIN, Yoshikatsu NAKAI

Abstract: The present study was undertaken to examine the relationship between ego states and their evaluation of nursing practice in care units for adult and geriatric patients in chronic stages.

The subjects of this study were seventy-nine students in the third grade at Nursing Subdivision of the K University College of Medical Technology.

Their ego states were assessed by the TEG, and analyzed in reference to their evaluation of nursing practice.

The following results were obtained:

1. Students in high evaluation levels of nursing practice had significantly higher scores in category A of TEG than those in low levels.
2. Many students in high evaluation levels had flat egogram pattern.
3. Most students in low evaluation levels had a pattern of low A scores.

These results suggest that the category A scores in egogram are closely related to the achievement levels in nursing practice.

Key words: nursing students ego states, TEG, evaluation of nursing practice

はじめに

実践の科学である看護学にとって、臨床実習はカリキュラム上重要な位置を占めている。21世紀医学・医療懇談会第1次報告¹⁾においても「医療人育成において、実習は、患者の疾病の状況や家族的・社会的背景、疾病の治療などの実態、患者やその家族と医療人との関係、医療チームの構成員間の関係などを理解する上で

極めて有益であり、その中で医療人に求められる態度・技能・知識や価値観などが修得されていくものである。すなわち、医療人は実習の中で患者に学びつつ成長していくと考えられる」と言及しており、ますます臨床実習の重要性が叫ばれている。

一方、看護学生の多くは青年期後期に属し、自我の発達過程にある。初めて患者と人間関係を形成し、ケアを試みるという体験は、大きなストレスと危機であるといえよう。しかし、臨床実習への積極的・主体的な取り組みは自我同一性の確立を促し、看護学生は拡散の危機を乗り越えながら自我同一性を確立していく²⁾とも

京都大学医療技術短期大学部（京都市左京区聖護院河原町53）
College of Medical Technology, Kyoto University
1996年7月31日受付

言われている。

しかしながら、2年次までの成績の如何にかかわらず、臨床実習において「患者と関係がとれない」「記録が書けない」「考えられない」という状況に陥り、実習不適応状態や実習目標に到達できない学生は少なくない。

学生が生き生きと看護を学び、かつ自我を発達させられるよう、個々の学生に合った効果的な指導が何より求められており、そのためには、学生個々のパーソナルプロフィールの理解が何より重要となる。

そこで、学生理解の一助として自我状態のありようを把握し、学生の臨床実習の到達にどのような関連があるかを検討した。

今回の研究では、自我状態をみる尺度としてエゴグラム（東大式エゴグラム）を用いた。エゴグラムとは、交流分析理論に基づき、3つの自我状態のエネルギーの負荷量を5つの尺度を用いて、グラフに示したものである。東大式エゴグラム（以下 TEG）は、健常成人を用いて標準化し、客観的で信頼性・妥当性をもった質問紙法エゴグラムとして開発され、現在は第2版が作成されている。その臨床的応用の有用性も検討されている^{3,4)}。「TEGは本来、個人が自己分析し、自己成長・対人関係の円滑のための道具として使用されることを目的としている。各人の自我状態の心的エネルギーを把握し、それにより自己についての気づきがおこり、自己成長へとつながるものである」⁵⁾。

エゴグラムと臨床実習評価に関する研究はいくつかの報告^{6,7)}はあるが、実習評価の高低による分析及びエゴグラムのパターン分類を用いた比較はない。

以上、臨床実習指導の一助とするため、看護学生の自我状態と成人・老人看護学実習一慢性期への到達度（評価）との関連性を検討した。

研究 方 法

1. 対 象

K 大学医療技術短期大学部看護学科3回生の学生79名（女性；77名，男性；2名）を対象

とした。

2. 方 法

成人・老人看護学実習（慢性期）開始時に、自己記入式質問紙 TEG 第2版を記入してもらった。

TEG は交流分析理論による自我状態を機能的に捉えて、親（P）・大人（A）・子ども（C）の3つにわけ、さらに P（親の自我状態）を CP（批判的な P）と NP（養育的な P）で、A（大人の自我状態）、C（子どもの自我状態）を FC（自由な C）と AC（順応した C）の5つ下位尺度にわけ、それぞれを0～20点で得点化し、自我状態を知ろうとするものである⁸⁾。

実習評価は実習終了時に、人間関係・看護過程・個別の看護の実践・ケースレポート・出席状況・態度面などを複数の教官により100点満点で得点化し総合評価した。

さらに、対象を実習成績によって、+1SD 以上（89点以上）を高評価群、-1SD 以下（72点以下）を低評価群とし、2群に分けて TEG との関連を t 検定を用いて分析した。

また、両群の学生のエゴグラム・パターンを末松らの分類⁹⁾に基づき複数の教官で分類し、検討した。

3. 期 間

平成7年4月～12月。

結 果

1. エゴグラムの下位尺度得点

学生のエゴグラム下位尺度の平均得点と標準偏差は CP は 7.3 ± 3.3 点，NP は 14.0 ± 3.3 点，A は 10.0 ± 4.0 点，FC は 13.0 ± 3.2 点，AC は 12.0 ± 4.3 点であった（表1）。

2. 高評価群と低評価群別にみたエゴグラム下位尺度得点

高評価群と低評価群の平均得点と標準偏差を表2に示した。高評価群は低評価群に比し、NP と A スコアが高く、低評価群は高評価群に比し、FC スコアが高い傾向が見られた。有意に差があったのは A スコアで、高評価群の方が低評価群に比し、高値であった（ $p <$

0.001)。

3. 高評価群と低評価群のエゴグラム

高評価群の学生 (n=12) と低評価群の学生 (n=10) のエゴグラムパターンを図1・図2に示した。高評価群のエゴグラムパターンは、平坦型が5例と最も多く、次いで、N型が2

例, FC 優位型, CP 低位型, NP 優位型, W型, M型が1例ずつであった。

低評価群のエゴグラムパターンは, A 低位型が3例, N型・NP 低位型が2例ずつ, U型・FC 優位型・M型が1例ずつであった。

両群のエゴグラムパターンにおいて同じ型であったのはN型・M型・FC 優位型で, その他は異なる型であった。

表1 エゴグラムの下位尺度得点 (n=79)

CP	NP	A	FC	AC
7.3±3.3	14±3.3	10±4.0	13±3.2	12±4.3
平均±標準偏差				

表2 高評価群と低評価群別にみたエゴグラム下位尺度得点

	高評価群 (n=12)	低評価群 (n=10)
CP	† 7.4(3.4)	7.2(2.9)
NP	16.0(2.4)	14.0(3.8)
A	12.0(2.0)	8.0(2.0)***
FC	13.0(2.9)	15.0(3.3)
AC	12.0(3.0)	13.0(4.4)
***p<0.001		

† 平均 (標準偏差)

高評価群: +1SD 以上 (89点以上)

低評価群: -1SD 以下 (72点以下)

考 察

1. エゴグラムの下位尺度得点に関して

小河ら¹⁰⁾杉田ら¹¹⁾の報告による短大看護学生の状況と比較すると, 今回の対象学生はFC・ACの得点がやや高い傾向がみられるが, ほぼ類似していた。すなわち, エゴグラム・パターンは, 平坦型でバランスがとれ何事にも適応しやすい特徴を持っていると言える。

2. 高評価群と低評価群別にみたエゴグラム下位尺度得点に関して

高評価群は, 低評価群に比し, Aスコアが有意に高いことから, 臨床実習の到達に自我状態のAの高低が何らかの形で関与していると推察される。

「Aが主導権を握っている時は, Pの偏見,

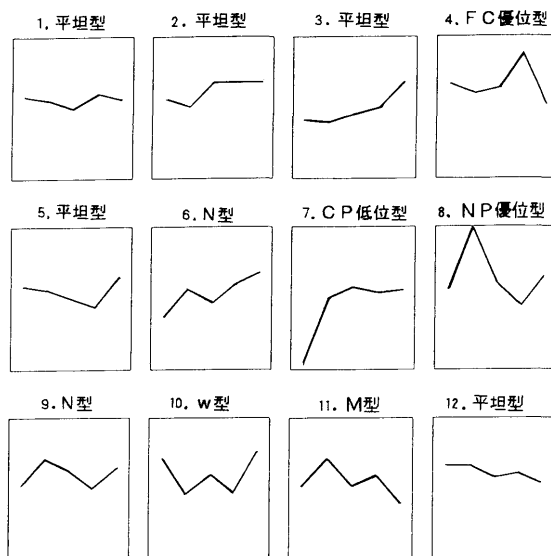


図1 高評価群エゴグラムパターン

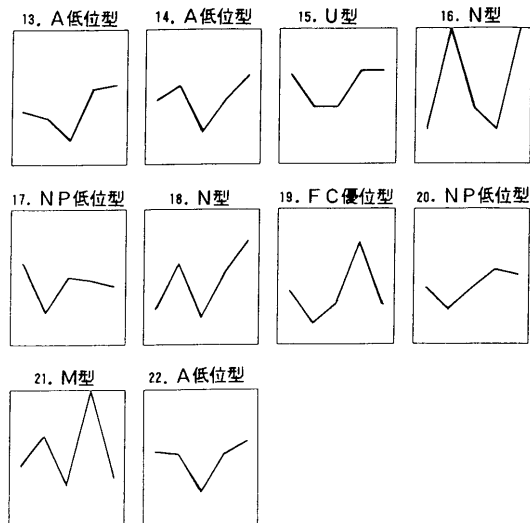


図2 低評価群エゴグラムパターン

Cの感情がコントロールされて、統合的で適応性に富み、創造性も高まる。そして自律性豊かな人間として活動できる¹²⁾」と言われている。

Aが高い場合は、客観的な心で現実を認識し、「今、ここで」を素直な感性で患者と現実世界を共有しつつ、ケアを試行していくことが出来るものと考えられる。

飯田ら¹³⁾は看護婦の現在の自我状態と理想の自我状態を調査し、「現在では“NPを頂点とするへの字、あるいはM型”、理想では“Aを頂点とするベル型”であり、現在のエゴグラムに比べ、Aに著しい差があり、ACを除いて高値であった」と言及している。

一般に看護婦の適性としてNPとAが優位である方が望ましいと言われているが、理想としてAの高い看護婦を希望している点からも、看護をしていく上でAの自我状態が重要と考えられよう。

3. 高評価群と低評価群のエゴグラムパターンに関して

高評価群と低評価群のエゴグラムパターンの中で、同型であったのは、N型・M型・FC優位型のみであった。しかし、同型でもAのスコアは、高評価群の方が高かった。その他は、明らかに異なる型であった。

高評価群では何事にも一番適応しやすいとされる平坦型が最も多く、安定した自我状態で患者と向き合い、効果的な実習ができていると考えられる。

低評価群のエゴグラムパターンは、A低位型が3例と多く、U型・M型の2例を加えると半数がA低位パターンであった。次いで、NP低位型が2例であった。

「A低位は高いCPとACに牛耳られて葛藤状態にあり、問題解決能力が低いため、混乱状態に陥りやすい。NP低位は思いやりに欠けてしまい、何事にも厳しい批判力、強い責任感でみてしまうため、相手の立場を考えることができない。しかし、両者ともACが高いため、周囲の顔をうかがってしまい、思うように自己主張できない。また、U型は心身症に最もなりやすい型である¹⁴⁾」と言われている。

低評価群では、臨床というストレスフルな状況下において不適応になりやすく、患者との関係も築きにくいと、実習到達も不十分になっているのではないかと考えられる。

このように、両群のエゴグラムパターンを比較してみると、いかに自我状態のありようが臨床実習の到達に深く影響を及ぼしているかが推察される。

4. 全体を通して

高評価群と低評価群の比較から、A スコアの高低とエゴグラムパターンの違いが明らかになった。低評価群は高評価群に比し A スコアが低く、またパターンにおいても極端に A や NP 低位を示す“V 型 TEG”が多い。

高評価群のエゴグラムパターンは比較的なだらかで、各自我が連動しあって安定して反応していけるのに、低評価群では低位の自我が前面にでてしまい不適応に陥りやすいと考えられる。

このように、A のスコアとエゴグラムパターンの両者から自我状態の把握が重要と言えよう。

「エゴグラムは検者が評価するというよりも、被検者自身が評価して、自分のエゴグラムパターンに気づき、それを自己啓発につなげることが望ましい。エゴグラムの偏りを修正するかどうかなどは、あくまで本人の決断によって、なされるべきである」¹⁵⁾とされており、指導者は学生の性格傾向や対人関係における行動特性を知り、より学生を理解する道具として有効に用いる必要があると考える。「保健医療従事者が多くの人々との豊かな人間関係をもつには、自分の素質と生育史の中で身につけた感受性や評価の仕方をもつレンズを自己観察し、相対化し、多くの人々にそのよさを感じ、認めうるようなレンズへと生涯かけて錬磨することがたいせつになるだろう」¹⁶⁾と宗像は述べている。

人と関わり、その関係性の中に重要な機能を発揮する看護にとって、自己理解こそ原点であり、帰着点になるという点からも、エゴグラムを学生個々人に適切にフィードバックしていくことが望まれる。

また、エゴグラムを用いた実習グループ編成についても検討していく必要があると考える。個人がグループのありように密接に関わることから、実習グループメンバーによるダイナミクスの影響も大きく¹⁷⁾、エゴグラムを用いたグループ編成の報告^{18,19)}もされている。我々も臨床実習中に不適応症状を呈した一学生について、グループメンバーのエゴグラムとダイナミクス

からの考察について報告²⁰⁾している。今回の結果と併せて、グループメンバーの構成と学習効果についての研究が重要と考える。

今回は、実習開始前の自我状態が6週間の慢性期実習到達にどのような影響を及ぼすかを調査した。厳密に言えば、実習評価時のエゴグラムで分析するべきであるという指摘も予測されるが、実習評価はある固定された一時期でなく、6週間全体の学生の形成的な評価であるという観点から捉えている。

また、エゴグラムの変動についての報告^{21,22)}もされており、6週間の実習中にも多少の変動は予測される。しかし、余りに短期間の調査は信頼性が低くなる可能性も高く、もう少し長期に渡った変動を論じる必要があると考える。今後は、「3年間の看護学教育の中で臨床実習をはさんでどのような変化が見られるのか」といった縦断的調査が望まれる。

また、実習評価の妥当性、実習評価の構成要素とエゴグラム下位尺度との関連を明らかにすることがさらなる課題と言えよう。そうすれば、実習指導においても個々人にどこをサポートすればよいかの具体的指標が得られるものと考えられる。

当面は、低評価群において A スコアが有意に低かったという今回明らかになったことに関して、低評価群の持ち味とも言える P や C の高さをよりよく引き出して、A を高める指導が望まれよう。

学生の自我のありようを一つの大切な個性として見守りながら、その個性に合わせた具体的な方略を立て、学生自身が自律的に学び取っていけるよう、ていねいに寄り添っていく指導が何より重要であると考えられる。

結 論

K 医療技術短期大学部看護学科3回生79名の自我状態(TEG)と実習評価との関連を検討し、以下の結果を得た。

1) 高評価群は低評価群に比し、有意に A スコアが高かった。

2) 高評価群のエゴグラムパターンは平坦型

が多かった。

3) 低評価群のエゴグラムパターンは A 低位型・U 型・M 型の A 低位パターンが多かった。

4) 今後は実習評価の妥当性・実習評価の構成要素とエゴグラム下位尺度との関連, A の低い学生に対する実習指導方法が検討課題である。

文 献

- 1) 21世紀医学・医療懇談会教育部会：21世紀の命と健康を守る医療人の育成を目指して，21世紀医学・医療懇談会第1次報告．文部省高等教育局 1996：7
- 2) 吉永貴久恵，近森栄子，大沢正子：臨床実習にともなう自我同一性と実習適応感の変化．神戸市立看護短期大学紀要 1990；9：35
- 3) 大島京子，堀江はるみ，吉内一浩，他：東大式エゴグラム（TEG）第2版の臨床的应用．心身医学 1996；36(4)：316-325
- 4) 吉内一浩，堀江晴海，大島京子，他：東大式エゴグラム（TEG）第2版の臨床的有用性の検討．心身医学 1995；35(7)：562-567
- 5) 末松弘行，野村 忍：東大式エゴグラム（TEG）手引き．東京：金子書房，1994：1-2
- 6) 河端寿美子，佐々木泰子，鈴木 妙：実習成績とエゴグラムとの相関についての一考察（第2報）．看護展望 1988；13(9)：63-67
- 7) 木村紀美，米内山千賀子，花田久美子：エゴグラムの変動と看護学実習評価との関連．日本看護学教育学会誌 1996；6(1)：45-51
- 8) 前掲書，東大式エゴグラム（TEG）手引き，13-16
- 9) 東大医学心療内科：エゴグラム・パターン—TEG（東大式エゴグラム）第2版による性格分析．東京：金子書房，1995：49-140
- 10) 小河育江，掛橋千賀子：臨床実習におけるグループ編成に関する一考察—エゴグラムの活用を試みて—．第24回日本看護学会集録—看護教育— 1993：22-25
- 11) 杉田明子，太陽美子，酒井恒美，他：短大看護科学生の東大式チェックリストによるエゴグラムに関する基礎的検討．第22回日本看護学会集録—看護教育— 1991：204-206
- 12) 前掲書，東大医学心療内科：エゴグラム・パターン—TEG（東大式エゴグラム）第2版による性格分析，26
- 13) 飯田真佐子，金井ヒロ，尾岸恵三子：エゴグラムからみた看護婦の成熟性について．看護展望 1986；11(9)：34-43
- 14) 前掲書，エゴグラム・パターン—TEG（東大式エゴグラム）第2版による性格分析，80-87
- 15) 前掲書，エゴグラム・パターン—TEG（東大式エゴグラム）第2版による性格分析，6-7
- 16) 宗像恒次：行動科学からみた健康と病気．東京：メヂカルフレンド社，1993：361-363
- 17) 大柴弘子：臨床実習におけるグループダイナミクス—人間関係と実習成果—．看護展望 1986；11(8)：61-69
- 18) 横田栄子，白井陽子，清田敏恵：実習達成感を高めるためのグループ編成の検討．第22回日本看護学会集録—看護教育— 1991：188-191
- 19) 前掲書，臨床実習におけるグループ編成に関する一考察—エゴグラムの活用を試みて—，22-25
- 20) 豊田久美子，任 和子，中井義勝：臨床実習中不適応症状を呈した看護学生の一例．第21回日本心身医学会地方会演題抄録集 1996：31
- 21) 前掲書，エゴグラムの変動と看護学実習評価との関連，45-51
- 22) 藤井博英，山本勝則，神成礼美子：実習指導の客観的一指標としてのエゴグラムの導入．看護展望 1991；16(5)：75-80